

《連絡事項》※この時間については、定員六十四名という教室枠に順い、人数制限をさせていただきました。ご承知願います。

## 02の講義内容

出版社はなぜ四百字詰め原稿用紙を用いないのか？

「原稿用紙」には、一五〇字、二〇〇字、三〇〇字、四〇〇字という字詰め用紙が用いられてきました。学校教育では、通常四〇〇字詰め原稿用紙が主流でしょう。でも、いざこれが書くことを日々の仕事とする人々の社会ではどうでしょうか？とりわけ、出版社の原稿用紙、また、物を書く作家たちの原稿用紙はどのようなものでしょうか？

現在では、電子ソフトの原稿用紙が主流となりつつあります。文書作成用の原稿用紙について確認し、実際に利用してみることにはまいしよう。ですが、これもあくまで最大の機能を發揮しているとは言い難いものがあるはずです。私は、この便利な書記道具を用いることを諸手を挙げて賛成しているわけではありません。むしろ、この書記道具の利点を最大限に確認した上で、この書記道具では表出できない人の「書く」という能動行為の原点に立ち帰って、自らの筆遣いの文字で「清書き」して、私文書類は提出することをお奨めしています。

電子ソフトの原稿用紙は、どのような媒体か

文書書込み用のワードプロセッサ内に搭載されたもので、今日日本では、「ワードプロセッサ」のソフトとしては、アメリカ合衆国のマイクロソフト社の「ワード」と日本のジャストシステム社の「一

太郎」が用いられています。この両用は可能ですが、この授業では、後者を利用していききたいと考えています。その理由の一つに、文書保存容量の違いがあります。

「一太郎」にも年度毎でバージョンの異なりがあつて、「一太郎2007」迄が現在巷で利用されていますが、文章を書くことを主眼に据えて見たとき、今確実に良好に使用できるのは「一太郎2005 + ATOK2005」でしょう。このシリーズには「一太郎文豪 + ATOK2005」が別に発売されています。プロの作家という限られた少人数の人々を対象に製作されたソフトです。

開き方は、ジャストシステムのアプリケーションから「一太郎」を開き、上部の標示「ナビ」を開き、「よく使うテンプレート」を次に開きましょう。そして「原稿用紙」を選択してクイックします。すると、七種類(拡張子は「JTC」で共通)の原稿用紙が表示されてきます。ここで、この教場で実際紙出しが可能な▶サイズの原稿用紙を選択します。これに「縦書き」型と「横書き」型の二種類があります。この電子ソフトの原稿用紙では、以前お話し申し上げましたように大きな差は出ないのですが、不断から修練するには、「縦書き」を選び用いておくと混乱が少なくなります。

書いてみよう！電子の原稿用紙に

題は、ずばり「和語と漢語」とします。副題は各自の自由とします。ここで云う「和語」とは、日本列島に居住する最初からあつたことば「日本語(やまとことば)」をこう呼称します。これを中国から朝鮮半島を経由して渡来した「漢字」で記載したことは「漢語」と対比して用いています。これに類似した表現に「漢文」と「和文」

という言い回しもよく用いられてきました。ここで云う「漢語」「漢文」と云っても、中国人が用いるのと、これを学んだ朝鮮人・日本人などが用いるのでは大い違いがあります。後者を「和製漢語」「和製漢文」と呼ぶことで区別されています。昔、中国の随國・唐國などに使節を遣わした折りに携えさせた文書に「国書」があります。その一人に遣隋大使小野妹子が隋の煬帝に奉呈した「日出處天子、致書日没處天子、無恙……」（『北史』〈隋書〉）の書き出しはよく知られています。もう一つ国書として、「烏羽の書」逸話は、本邦の史書『日本書紀』が記録しています。欽明天皇の年の夏五月、高句麗からの使節船が越國（石川県）の海岸に漂着し、翌年敏達天皇は使者に席巻し、高句麗王からの国書を受け取ります。天皇はこの国書を大臣蘇我馬子に授け、史に三日のうちに解読することを命じましたが、誰一人解読がなりません。これを船史の祖王辰爾は解読してみせたのです。この国書は紙でない真つ黒な烏の羽根に書記されています。彼は即座にこの羽根を煮え立つ湯気の上に翳した後、これを白い絹のうえに押し当てたのです。そこには文字が写し出されていました。この「烏羽の書」逸話から私たちは、日本人がこうした高度な文字伝達方法を会得してなかったことを知ります。これを熟知することで、日本の書記文字文化は大きな進展を遂げたことでしょう。上記の妹子が携えた国書もその経験値がふんだんに活かされていたにほかなりません。

このような外交文書とは別に、国内では和文文化が遂行していきま。ここで同じ四百字程度の当時の日本語の文章を紹介しますと、『天壽國曼荼羅繡帳銘』があり、すべてを漢字表記していますが、字音と字訓で用いた文字数は百五十文字あり、日本語のことばを漢字でもって表記した並々ならぬ記録方法を知ることができます。この集大成が和銅五年（七一）成立の『古事記』です。作者は太安万侶、彼はこの漢字を駆使して日本語の文章を記録して見せたのです。冒

- 3 -

頭の書き出し「久羅下那洲多陀用幣流之時【流字以上十字以音】如葦牙因萌騰之物而、成神名、……」と彼の文章工夫を試しに遣ってみてはと思うのです。一句を綴るに漢字の文字を音字と意字とを併用しながら四百字詰め原稿用紙A4サイズに和製漢文風に現代文章を作成してみましよう。

例えば、「耳言」「三五月」等は、今でも活用できる義訓となつています。古くは「馬聲蜂音石花脚躑」「山上復有山」「二五」という戯劇も記紀万葉に見えています。こうした義訓・戯訓を交えながら、人に伝えるための創作文章を書いてみましよう。

※※ 四〇〇字の漢字表記文章模範 ※※ 参照

《参考文献資料》

鈴木修次著『漢字情報力再発見』（一九九〇年、創拓社刊）  
橋本万太郎著『世界の中の日本文字―その優れたシステムとはたらき』（昭和54年、弘文堂刊）

漢字とかなで理解度を高めてみよう！

「書記伝達」する情報伝達媒体である新聞・雑誌・広報誌が「見出し」や「小見出し」の果たす役割は、時間の短縮、視覚掴み読み繋がついています。これまでの時間で、漢文のみの文章を作成してみても、どこに何が書かれているのかを見抜くには、容易でないことにも気づくことに繋がっているでしょう。この書き手の労力も計り知れないことも実体験したわけです。この漢文体の文章に幾つかの見出しや小見出しをつけて見やすくしていきます。ついで、和語の特徴でもある文字修飾語をかな表記やカタカナ表記を駆使して織り交ぜて、文章を八〇〇字に拡張していきましょう。

- 4 -